安田講堂攻防50年 反戦訴えた学生

東大紛争 問い続け

ベニヤ板が張られた窓に撃ち込まれる催涙弾と、放物線を描く石や火炎瓶――。50年前の1月18日、学生が占拠した東京大学の安田講堂に機動隊が突入した。日本が揺れた「あの日」の意味は何か。当時の学生たちは今も問い続けている。【金森崇之】

安田講堂から正門へとのびるイチョウ並木に、機動隊員が構えるジュラルミンの大盾が並んでいた。明治大3年で、他大学からの応援の「外人部隊」だった米田隆介さん(72)＝東京都内在住＝も講堂にいた。

1969年1月18日午後1時過ぎ。東大生ら数百人が立て籠もる安田講堂の封鎖解除が始まった。放水を浴びせ、催涙弾を打ち込みながら近づく機動隊に対し、学生たちは投石や火炎瓶で応戦した。

東大紛争は68年1月、研修医制度を巡って医学部学生がストライキに突入したことが発端だった。同年7月、学生たちは大学変革を目指して安田講堂を占拠し、東大全学共闘会議（全共闘）を結成した。日米安保条約反対やベトナム反戦とも結びついた運動は、学園紛争の象徴となった。

「あのころは戦争が身近だった」。東大工学部の学生だった千葉県松戸市の医師、堂垂伸治さん(70)は振り返る。都内の米軍病院にはベトナムの前線から負傷兵が運び込まれ、沖縄からはB52爆撃機が飛び立っていた。堂垂さんは「このまま研究していていいのか」という思いに駆られたという。安田講堂には籠もらなかったが、当日は東京・神田で機動隊と対峙していた。

安田講堂の攻防は2日間に及んだ。米田さんも逮捕され、凶器準備集合罪などで懲役2年6カ月の判決を受けて服役した。

「逮捕は覚悟していたし、当時は達成感も感じていた」

事件を機に全共闘運動は全国の大学に広がったが、長くは続かなかった。72年には連合赤軍による「あさま山荘事件」も起きた。先鋭化した運動は世論の支持を失い、米田さんも堂垂さんも活動から離れた。

その後、学生運動は下火になったままだ。2015年には安全保障関連法に反対する大学生グループが注目されたが、政治離れは続いている。米田さんは「安田講堂後、セクト（党派）間の争いや内ゲバ（内部暴力抗争）が続いたことで、運動をなくす原因をつくってしまった。その意味では今の学生に対し、反省以外の何ものでもない」と語る。

堂垂さんも「私たちの世代の活動が『運動をやっても報われない』と感じさせてしまったかもしれない」と話す。ただ「平和は与えられるものではなく、皆で成し遂げるものだ」との思いは50年変わらないという。

東大安田講堂事件関連年表

1968年1月	研修医制度を巡って東大医学部が学生ストライキに突入
7月	学生が安田講堂占拠 東大全学共闘会議結成
11月	東大の大河内一男学長辞任。加藤一郎法学部長が学長代行就任（69年学長就任）
12月	東大が次年度の入試中止を決定
1969年1月	安田講堂攻防戦
9月	全国全共闘の結成集会
1970年3月	よど号ハイジャック事件
1972年2月	連合赤軍あさま山荘事件

運動先鋭化「政治離れ招いた」

上右安田講堂に立て籠もった米田隆介さん。運動を離れた後は会社員となった＝東京都千代田区で
上左東大紛争に参加した堂垂伸治さん
＝東京都文京区で、いずれも金森崇之撮影
下機動隊の放水を受ける東大安田講堂
＝東京都文京区で1969年1月18日